

平成27年12月14日

岩美町議会

議長 船木 祥一 様

岩美町議会

産業福祉常任委員会

委員長 田中 克美

委員会行政調査報告書

岩美町議会産業福祉常任委員会は、平成27年10月28日に宮崎県綾町、29日に同県西米良村、30日に熊本県阿蘇市（阿蘇駅構内レストラン「火星」）で行政調査を行いましたので、岩美町議会会議規則第77条の規定により別紙のとおり報告します。

## 【今回の行政調査を行った目的】

昨年5月に公表された日本創成会議の「消滅可能性都市リスト」は、各方面で大きな反響を呼び、人口減少をめぐる本格的な議論を引き起こした。

人口減少社会の到来は不可避でもある。国立社会保障・人口問題研究所は、このままでは日本の総人口は2048年に1億人を割り、2060年には現人口の約3割減の8,674万人になると推計している。

わが岩美町も、第9次総合計画（平成24年度～平成28年度）において町の将来像を示しているところであるが、議会として人口減少時代における町のあり方を改めて調査・研究し、課題を整理する必要性を感じた。

そこで、まず全議員で人口減対策の先進的な取り組みをしている島根県邑南町・美郷町、同県中山間地域研究センターを視察し視野を広げ、さらに産業福祉常任委員会で人口減対策に係る産業振興や若者が子育てするための支援策について、宮崎県綾町・西米良村を視察先として選択し、認識を深めることとした。

また、平成29年春に運行開始予定の「トワイライトエクスプレス瑞風」の東浜駅停車による第一次産業の可能性や観光事業と農業との融合等を研究し、議会の役割を認識するため、熊本県阿蘇駅（クルーズトレイン「ななつ星」停車駅、専用レストラン「火星」）の視察も行った。

## 【行政調査出席者】

産業福祉常任委員会

委員長 田中 克美

副委員長 松井 俊明

委員 芝岡 みどり

委員 川口 耕司

委員 宮本 純一

委員 柳 正敏

随員

産業建設課長 村島 一美

議会事務局書記 前田 あずさ

## 【1】宮崎県綾町の調査報告

### 1. 調査事項及び調査期日

- (1) 調査事項 人口減対策に係る産業施策、若者が子育てするための支援策について
- (2) 調査期日 平成27年10月28日 13時30分～15時30分

### 2. 視察先対応者

押田 和義 議長  
吉川 直毅 議会事務局長  
湯浅 国弘 議会事務局書記

### 3. 調査の目的

人口減対策に係る産業施策・子育て支援策として、有機農業でのまちづくりや若者が移住定住するための取り組み等を学ぶ。

## 4. 調査の概要等

### (1) 町の概要

人口約7,200人、宮崎県のほぼ中央に位置し、宮崎市の背後地として西方に20km、総面積は95.19平方kmで、国富町、宮崎市高岡町、小林市須木村、西米良村に隣接している。東部が一部平坦地をなしており、西北部は広大な森林が広がり、九州山脈に連なっている。

大淀川水系の綾南川、綾北川に囲まれた地域は、全国でも貴重な照葉樹林を形成しており、昭和57年にはこの一帯を九州中央山地国定公園として指定を受け、また58年には日本の自然百選、60年名水百選、61年森林浴の森百選、青空百選、62年星空百選の町、平成3年ふるさとづくり大賞、平成4年花のまちづくりコンクール最優秀賞、平成5年朝日森林文化賞、平成7年「水の郷」認定、冬の星空日本一等の指定及び賞を受けた。

多くの自然を背景に、町の基本理念として、照葉樹林都市・綾「大自然の中で生活文化を楽しむ町づくり」を掲げ、本ものをつくる町、手づくりの町、有機農業の町づくりとして、綾町を全国に広く知っていただき、選んでいただける産業観光のまちづくりを推進している。

農業は、土からの文化を追求し、化学肥料、農薬に頼らない健康で安全な自然生態系による農畜産物の生産。工業は、使う人の身になり、心のこもった手づくり工芸品づくりを進めている。

照葉樹林の生い茂る国定公園内に世界一の歩道吊橋や照葉文化館、また、さまざまな施設をつくり、スポーツ合宿を含めて、年間100万人を超える人々が訪れる産業観光の町として脚光を浴びている。

### (2) 質疑・応答

#### 《農産物について》

問：農産物認証を受けていないものの販売方法はどうか。

答：JAがもっている販売ルートでやっている。

問：所得がないと農業をやっていけない。有機無農薬の農産物販売だけではないと思うが、総体としてはどうか。

答：ふるさと納税等、生産されたものは流通に乗っており、平均所得は約300万円だが（青色申告会データによる農業所得）、平成26年度は約350万円に増えている。

問：農産物の販売ルートはどうか。

答：町内の農産物直売所「手づくり本物センター」など町なりJAなりがつくったルートや、個人の農家が直接契約を交わすこともある。食の安心・安全を求めて綾町に移って来られる方もある。

問：個人でネット販売される方があるか。

答：ある。

問：近年の就農者数は。

答：Uターン29人、Iターン29人、新規就農者9人だ。

問：就農について特別な制度があるか。

答：新規就農者には住宅が手当される。就農に当たって町の補助はない。農家に指導を受けながら、2年間で独立してもらわなければならない。農業に魅力を感じて綾町に

来られるということ。

問：小規模農家、大規模農家があるが、新規就農の方が生計を立てるのは大変だ。綾町では流通、販売が出来ているのだと思う。少子高齢化等の課題もあると思うが、リタイヤする方もあるのか。

答：綾町は比較的子ども（息子）が後継者となる確率が高い。

問：息子さんが仕事をやめて、後継ぎとして専業になる例はあるか。

答：20代・30代でUターンされて、専業になる人もある。所得が安定してくれば黙っていても帰ってくる。

問：有機農産物を今後どのように発展させていくかという中で、6次産業化がある。有機農産物を加工品でどのように生かそうとしているか。また、ふるさと納税の納税額が増えている。有機農産物がふるさと納税に果たしている役割はどうか。

答：6次産業化について一農家で生産から加工、販売までは難しい。綾町では町がやっており、大きなものでは日向夏のジュースと町内産の甘藷を原料にした焼酎で、後はドレッシング等だ。

農業支援センターを立ち上げており、加工品の開発からふるさと納税の返礼品の送付も行っている。

問：ふるさと納税は返礼品目当てではなかったと思うが、6次産業化が関わる中で魅力的になっているのだと思う。返礼品の種類や予算はどうなっているか。

答：一万円の寄附で半分程度の返礼品だが、納税額10億円のうち半分残るのかということになると、送料等の費用もあり、残るのは3～4割だ。

問：全国的に綾町ブランドの発信ができていると思うが、今後に向けた思い入れはどうか。

答：4位だったのが10位となっており、いつまでも10億円はないと思う。この機会を契機に、返礼品で「良いもの」と思っただき、次は直接申し込んでいただけるよう、いろいろな品目を入れている。町内には工芸家も多く、約40の工房（ガラス・陶器・木工・染色等）があり、工芸品も返礼品に入れている。

返礼品は、地元産品の買い上げに貢献している。この機会にPRして綾町の良さを知っただき、今後の消費拡大につなげていければいいと考えている。

問：返礼品のパフレット決定までの過程はどうか。どの機関が決めるのか。

答：町長、農業支援センタートップの農協組合長だ。農業支援センターが協議している。

38アイテムある。木工品プラス農産物という新しい形もできている。町主導でスタートしたが、生産者が新しい商品を開発して「返礼品に使ってほしい」という動きもある。牛肉と豚肉がトップで3ヶ月待ちだ。

問：販売ルートで生協が出ていたが。

答：栽培契約している。グリーンコープの栽培基準に基づいてつくったものをJAを通して流通させている。最初は豚肉だった。

問：農産物直売所「手づくり本物センター」の農産品は認証品か。

答：認証品だ。販売額3億1,800万円のうち（平成22年）、農産物は1億4,800万円だ。弁当など惣菜品の売り上げが大きい。

問：どのような人が買いに来るのか。

答：「手づくり本物センター」は町外の方が多い。宮崎市内から業者が朝一番に買いにく

る（市内から車で約40分）。有機農産物と加工品のみ置いている。

綾町はイベントの多い町で、普段野菜を求めて宮崎市内から来られる方やイベントを通じての入り込み客が、かなりの消費拡大につながっている。

問：実践振興会議の中で多くの組織をつくっておられるが、組織づくりとかリーダー養成などに役場が肩入れしたのか、自主的か。

答：根本に自治公民館制度がある。昭和40年代後半に、町から直接依頼するという意味での区長制を廃止して自治公民館組織にして、自分たちの集落は自分たちの経費で、自分たちでまかなっていきこうという考え方のもとに立ち上げた。すべてのことにおいてそれが基本になっている。町からは年5万円ほど助成している。

22地区公民館長と町長で月1回公民館長会議を開いている。そこで行政からの連絡、住民の要望、提案を聞いたりしている。綾町の町づくりは、町と議会と公民館の3つの車で回っているようなものだ。

問：「一戸一品運動」とは何か。

答：町全体の文化祭と公民館単位の文化祭があり、その時に農産物でなくても何でもよいが、提供するためのものだ。宮崎市内などから公民館単位の文化祭にも200人ぐらい来る。

《子育て支援、定住促進等について》

問：出産祝金事業で、第3子は10万円、第4子は30万円の祝い金を出すということだが、年間何人ぐらいの出生があるか。

答：年間の出生は70人ほどだ。一世帯に3人の子どもがいるのはめずらしくない。

問：町立保育所の整備とあるが、保育所数は。

答：町立保育所3、私立保育園1、私立幼稚園1だ。

問：未婚者に対しての結婚対策はどうか。

答：民間団体（商工会等）が行っていたが、ここ1～2年はない。

定住促進のための住宅補助は大きかった。安い家賃で住めるなら綾町から出ない。

6年間補助すれば、綾町に愛着ができて出て行かない。

問：空き家再生事業の実績はどうか。

答：町有にしたものが35戸ある。その期間（5年）だけ町有にして、その後所有者に返す。

家賃は2～3万円だ。水回りを120～150万円でリフォームし、そのリフォーム費用を5年間で回収するということだ。

問：空き家登録に仏壇等が障害になることもあると思うが、その辺はどうか。

答：それがなければ35戸より増えていると思う。家財の処理など持ち主ができないということであれば、職員が荷物も撤去する。

問：町有にした35軒はうまっているのか。

答：入居は100パーセントで、足りないくらいだ。

問：かなりの期間、人口7,500人を維持しておられる。人口キープのために「これだけは」ということがあれば、お聞かせ願いたい。

答：若者の定住対策の一番の柱は、民間アパート家賃補助だ。その時期に空き家がたくさん出てきて、これも事業に組み込んだ。住宅を十分準備できたことが若者を呼び込み、子育て世代が増えたことで子どもも増えた。しかし、これが今後も定住につなが

るかは疑問だ。

問：若者の定住対策支援を展開されたからこそ、人口減がここまで収まったのだと思う。粘り強く事業展開しなければならぬと思うが、「これだけは」ということがあればご教示いただきたい。

答：岩美町は地域資源が素晴らしい。住んでいる者には当たり前で気付かないものもあるが、外から見たらうらやましい。

綾町は森や自然を残すところから始めた。自分たちの地域資源を見つめ直すことが大切だ。長い歴史の中で有機農業を柱にして、ぶれずにまちづくりをやってきた。若者に綾町を選んでもらえる、定年した方が老後の地として綾町を選んでもらうように総合的にやってきて、今に至っていると思っている。東日本大震災の移住者も30世帯くらいある。それらが総合的な微増につながったと思っている。

前町長は6期された。現町長は7期目で、前町長の流れを引き継いでいる。現町長の前職は農協組合長だ。綾町は1町1農協なので、その点は流れがスムーズだ。有機農業も農協の努力のお陰で今の振興がある。

問：自分のまちを知るために、自治組織は大切だと思う。このようにすれば円滑に運営できるということがあれば、ご教示いただきたい。

答：基本的には「自治」なので、30戸の集落から大きい集落は300戸あるが、それぞれの公民館長を中心に自治組織を形成して運営している。町は、公民館単位で町政座談会の出席率や健診の受診率等競わせている。

問：「気付きが大切」ということがあるが、役場と議会だけでは発見が難しい。自治組織と関係を持つと、まちをよく知ることができると思うが、その辺はいかがか。

答：ある意味町は、議員が要望するよりも公民館が上げてきた要望の方を取り上げる。

問：自治公民館制度の中の、「政策の立案から策定、執行、評価の各過程に参画」とは、どの程度の参画なのか。

答：町の行事等は全部お知らせする。当然お願いされる分もある。毎月5日に公民館長会があり、それをもち帰り、10日ごろに各公民館で定例の役員会を開く。公民館の下に班という組織があるが、そこに周知して集落全体に周知する。吸い上げについてもそのようにする。

毎年5月か6月に、22の全集落で町長と各課長が出席しての町政座談会がある。町長がここで直接住民に事業説明し、要望も聞く。要望や意見はすぐ反映する。

## 【2】宮崎県西米良村の調査報告

### 1. 調査事項及び調査期日

- (1) 調査事項 人口減対策に係る産業施策、若者が子育てするための支援策について
- (2) 調査期日 平成27年10月29日 10時～正午

### 2. 視察先対応者

浜砂 征夫 議会議長  
浜砂 和広 議会事務局長  
牧 幸洋 むら創生課 課長補佐  
石崎 佳代 福祉健康課 主幹

### 3. 調査の目的

人口減対策に係る産業施策・子育て支援策として、西米良型ワーキングホリデーの村づくりや若者が移住定住するための取り組み等を学ぶ。

### 4. 調査の概要等

#### (1) 村の概要

人口約1,200人、宮崎県の中央部にあたる児湯郡の西部に位置し、熊本県との県境にあって、九州中央山地国定公園（昭和57年制定）の一角にある。面積は271.56平方kmで、地形は東西に狭く南北にやや長い菱形の形をしており、総面積の約96%が険しい山々で占められている。低いところでも海拔200mを超える山地に属しており、1,722mの市房山、1,547mの石堂山、1,188mの天包山などの高い山々に囲まれている。

椎葉村に源を発する一ツ瀬川は、村の中央を北から南東に流れ、板谷川、小川川の支流と合流して太平洋に注ぎ、西部を南に流れている尾股川は、綾北川に合流し、大淀川として大きな流れとなる。

西米良村は古来、日向の国に属し、1501（文亀元）年、隈府城主菊池氏が入山、その後400年もの間、菊池氏によって統治されてきた。「貧しさに耐えながらも文武を怠らず、礼節を重んじ、国家社会に尽くす」としたその教えは、現在も菊池精神として村民の心に受け継がれている。

1889（明治22）年5月1日の町村制施行によって西米良村が誕生。1989（平成元）年には村制100周年を迎えた。

現在、「菊池氏の薫陶・生涯現役元気村『カリコボーズの休暇村・米良の庄』」の整備を進めており、これは交流人口促進による村の活性化を図るとともに、快適な定住地の形成に努めながら魅力ある自然や風土、歴史、文化など地域固有の資源にテーマ性を持たせた地域づくりを推進するというものである。

特に1997（平成9）年度、全国に先駆けて取り組み始めた「西米良型ワーキングホリデー制度」は、交流人口拡大や過疎活性化に大きな効果を上げている。遠くは北海道や沖縄など県内外から毎年約50人が参加しており、リピーターも定着している。

近年、特産のホオズキを生かしたイベントの実践や語り部、花き栽培、山村留学など地域特性を応用した村づくりも注目を集めており、2003（平成15）年度には東洋一の木造車道橋「かりこぼうず大橋」が完成。年間14万人以上の人々が訪れている。

2000（平成12）年度に過疎地域自立活性化優良事例国土庁官賞、2002（平成14）年度優良観光地づくり賞、2004（平成16）年度に地域づくり総務大臣賞表彰を受賞。さらに2003（平成15）年度は黒木定藏村長が観光カリスマ百選にも選ばれ、2006（平成16）年度は、オーライ！ニッポン大賞（※全国の都市と農山漁村の共生・対流に優れた取り組みを表彰し、国民へ新たなライフスタイルの普及定着を図ることを目的として、オーライ！ニッポン会議、農林水産省が主催。平成15年度より開催。）を受賞している。

#### (2) 質疑・応答

問：村民に危機感も併せて協力姿勢があると思うが、火が付くまでに時間がかかったか。

答：例えばある地区では年間50くらいの事業を行っているが、最初は役場の提案に対して、「困難だ」という反応もあった。繰り返し説明し、少しずつ理解し、取捨選択しながら一緒にやっていくというやり方をしてきた。

役場に約70人の職員がいるが（看護師、保育士含む）、地区担当班をつくって支援してきている。村が一方的に提案したような形にはなっているが、理解し乗ってきてもらっている。そのような寄り添い方をした。合併問題もあり、地域にも危機感があって、何とかしようという思いがあったと思う。

問：リーダー的な存在があったのか。

答：村長（5期目）だと思う。村長から区長さんなどに働きかけた。行政提案という形だと思うが、やりっぱなしにしないよう心掛けている。人口が少ないので皆の顔が見え、やりやすいところもある。

問：村民が自信に目覚め、そこから継続したと思うが、役場の働きかけはどうだったか。集落ごとの活動につながるような役場の働きかけの実例はどうか。

答：役場提案のもの、集落提案のものがある。合併話もあり、取り組みのきっかけになった。刺激された集落が「うちもうちも」ということで広がってきた。疲れない程度の持続性のあるイベントになっている。成功例もあるが、失敗例（続かない）もある。

役場には地域づくりのコンサルタントが入っている。アドバイスを受けながら、村長が旗振りをする。

問：コンサルタントは、地域おこし協力隊か。

答：別の者だ。

問：地域おこし協力隊は3年間の支援だが、その後はどうか。

答：3年間で地域の地盤づくりをしている。「移住」というキーワードでやっている。移住相談会をしているが、移住してきた時にどうかと感じている。地域おこし協力隊はハードルが高いが、プロジェクトに関わってもらえる方がくればよいと思う。

問：地区担当班をつくって支援されているということだが、規則的なものはあるのか。

答：地区ごとにイベント数の多少があり、配置換えがある。希望はとっていないが、地域の地区に置く配慮はある。

問：責任者は誰か。

答：村長だ。

問：これだけの事業を実施し成功させる中で、財源確保の工夫はどうか。苦労よりも工夫をされていると思う。単発でなく、このように展開されるのは工夫が必要だ。例があれば教えてほしい。

答：ハード事業が少ないので、借金があまりない。貯金してやっている。

総体的に減らしてやっているところもある。過疎債等有利なものもある。補助金をとってきて実施するということはあまりない。規模的に無理や無駄をしないことだ。

問：これだけ先進的にされ、計画的にも素晴らしい。職員の取り組み、計画性、責任の持ち方だと思う。

答：地区担当のルール化は大事だと思う。代休も取らず、ボランティア的にやっている職員もいるので、対価を考えなければならないと思う。

問：職員はみな村民か。

答：Iターンの者もいる。

問：お年寄りイコール介護ということがありますが、皆さん生きがいを持ってやっておられる。それを若い方が受け継いでいると感じた。

限界集落となり、行政が支援するという集落が多くなってくるので、自分ができることを考えなければならないが、自分たちだけではできないので、行政と一緒にやっての取り組みが必要だと思うが、その辺はどうか。

答：モデル地区となっている集落があり、それを他の8つの地区に移して同じようにやっていけるようにすることが課題だと思っている。

問：いろいろな事業をやっているが、発想を生かす仕組みはどうしているのか。全部村長が指示を出すことではないと思う。

答：元々ある素材に村の歴史等を引っ付けて行った。ストーリー性の大切さをコンサルタントも言われている。西米良村では米は少ししか収穫できないが、「おいしい」という付加価値を付けてやった。

問：いろいろなアイデアがあるが、生まれるだけでは駄目で、実行しなければいけないと思う。行政主導ということを言われたが、継続して村民がやれるようにすることは難しい。全体でやる仕組みはどうか。

答：仕組みということでなく、住民に本気になってもらうことが大事だ。

問：予算時期に議論すること等はないか。

答：トップダウンも多い。村長も観光カリスマで、国にずかずか行く方なので、そこから情報を取ってくる。職員よりも情報を持っている。

### 【3】「クルーズトレインななつ星」専用レストラン「火星」(熊本県阿蘇駅)の調査報告

#### 1. 調査事項及び調査期日

- (1) 調査事項 「トワイライトエクスプレス瑞風」(平成29年春運行開始予定)東浜駅停車による地元第一次産業の可能性や観光事業と農業の融合等について
- (2) 調査期日 平成27年10月30日 10時～11時

#### 2. 視察先対応者

複合観光施設「はな阿蘇美」 中山 謙吾 代表取締役

#### 3. 調査の目的

関係者と意見交換を行い、「トワイライトエクスプレス瑞風」(平成29年春運行開始予定)東浜駅停車による地元第一次産業の可能性や観光事業と農業の融合等について学び、今後の整備に生かす。

#### 4. 調査の概要等

##### (1) 阿蘇市・施設の概要

阿蘇市は人口約27,000人、熊本県の北東に位置し、北に南小国町・産山村・大分県日田市、南に阿蘇山を挟んで南阿蘇村・高森町、西に菊池市・大津町、東に大分県竹田市が隣接している。

規模は、東西約30km、南北約17km、面積は約376平方kmであり、地形は、阿蘇五岳を中心とする世界最大級のカルデラや広大な草原を有し、比較的平坦地の多い阿蘇谷

と、起伏に富み傾斜地の多い阿蘇外輪地域で形成されている。また、この地域は阿蘇くじゅう国立公園に指定されており、ハナシノブやスズランなど阿蘇特有の希少な植物が自生するなど、自然資源が大変豊富である。

気候は、年平均気温が約13℃で、年間降水量は約3,000mmであり、四季を通じて比較的冷涼で多雨な地域であるため、平坦地では稲作を中心とした農業が盛んで、また、山間地では高冷地野菜の生産に取り組んでいる。

観光面では、熊本県観光統計による県内の地域別観光客数の推移を見ると、阿蘇地域は他地域に比べ観光客数が群を抜いて多く、平成24年には1,600万人を超えている。阿蘇地域の中央に位置する阿蘇市では、県内最大の観光地であることを背景に、阿蘇の豊かな自然や特色ある施設を活用した観光振興を進めていくことが望まれている。

今回視察したJR豊肥本線・阿蘇駅構内にある「レストラン火星」は、週に2回、早朝阿蘇駅に停車する「クルーズトレインななつ星」（6時03分着、10時01分発）の乗客が、朝食を食べるためにつくられた専用レストランである。「ななつ星」が停車していない時間帯は、乗客でなくても食事（※前菜等はビュッフェスタイルで、メインを地元産の牛、豚、鶏から選ぶもの）を楽しむことができる。

建屋や店内インテリアのデザインは、「ななつ星」とトータルコーディネートされており、手掛けたのは水戸岡鋭治氏（※工業デザイナー・豪華列車「ななつ星」をはじめ、「ゆふいんの森」「いさぶろう・しんぺい」など多くの列車を手がけている）。

施設を視察するにあたり、「レストラン火星」を運営されている中山謙吾氏に、地元第一次産業の可能性や観光事業と農業の融合等についてご教示いただいた。

## (2) 質疑・応答

問：年間200万人の観光客が訪れる阿蘇で、観光客にターゲットを置くのではなく、まず「町の人たちが喜ぶ施設にしたい」との考えについて。

答：まず「町の人たちが喜ぶ施設にしたい」。そういう思いが一番伝わっている。

お金があれば宣伝できるし、今だとネット等の媒体もあるが、どんなに宣伝しても、一番のロコミは町の人で、地元の人からの応援が大事だ。町の人がターゲットだ。日々見ておられるので、一切手が抜けない。地元の方から愛されて、そこから発信される情報が一番だと思っている。

地元の方に来ていただき、喜んでいただくことを大切にしている。売り上げが落ちようが、地元の方が離れていくことが非常に怖いし、気になる。地元の方にどれだけ利用してもらおうか、それが自分の仕事のバロメーターだ。

問：観光事業と農業の融合による発展の可能性について、どう考えるか。

答：旅館の話になるが、1泊2食8千円から始め、最後は2万円にしたが、値段に見合った料理なのかと疑問を持つようになった。そんな時に熊本市内でおいしいと思える洋食屋と出会い、すぐ弟子入りさせてもらった。いろいろなことを教えてもらった中に、サンフランシスコの「シェパニーズ」という世界でも予約が取りにくいレストランがあり、そこをめざしているということがあった。シェパニーズは、最初は女性ひとりで始めた小さなレストランで、オーガニック（※農薬や化学肥料に頼らず、太陽・水・土地・そこに生物など自然の恵みを生かした農林水産業や加工方法をさす。「特定非営利活動団体日本オーガニック&ナチュラルフーズ協会」HPより抜粋）の野菜を使っ

て人気となった。たくさんの農家が参入して農家とレストランが一緒になって、オーガニックの輪が広がり、シェパニーズを卒業した人がまたレストランをつくり、肉屋をつくり、スーパーマーケットをつくり、オーガニック地域となっている。

自分もシェパニーズに行き話を聞いたところ、「実は日本から学んだ食文化だ」と言われた。また、「日本は食べる人と農家が近い。横に農家がいる。」ということも言われた。それを聞いて、「自分たちは自分たちの価値を忘れている」と思った。

現在は6棟のヴィラ（※別荘・別邸）を、1泊2食10万円で売り出そうと思っている。なぜそのように高額かと言うと、契約オーガニック農家から良いものをなるべく高く買ってあげたいからだ。経営を楽にして、そこに新規参入者が来て、その人が持っている技術を学んで、シェパニーズみたいにどんどんオーガニックの輪が広がればよいと思っている。農業と観光は必ず結びつく。

これからはそこに着目して、日本人が忘れていた「農業」をもう一度再生できるのではないかと考えている。機械を入れ、薬を入れ、結局おいしくない安全でないものをつくらざるを得ない。それを逆転させるためには、ブランド化されたものをひとつつくるのが先ではないかと思う。

問：阿蘇における有機無農薬農業の実情と今後の展望はどうか。

答：多くの方が有機農業をやっているが、残念ながら2軒からしか買えない。経験がなく技術が伴っていないためおいしくない。その2軒はおじいちゃんの代からやっており土もよく、経験も技術もある。その品物を高く買い、規模を拡大していただき、そこから技術を学んで卒業生が出てほしい。そのようなグループができれば、地域も潤うのではないかと思っている。

問：レストラン「火星」での食事提供は、地元農業にどのような可能性を広げているか。

答：農業にはあまり寄与しないと思っている。買う量も知れている。そこに泊まって、そのものを食べて、ある程度グレードの高い人が発信してくれれば、それは役立つ。

「火星が来たから何？」というのが地元の反応だ。しかし、阿蘇という地域にとっては相当な宣伝価値、経済効果がある。今からだと思っている。

問：クルーズトレイン「ななつ星」への食事提供以外の影響や効果はどうか。

答：全国に阿蘇を知ってもらえることだ。岩美町も全国に名が知られると思う。

問：東浜駅は、世界ジオパークにも認定されている山陰海岸のエリア内にある。そのような背景の中で、まちを売り出すヒントをご教示願いたい。

答：自分は元々阿蘇の人間ではない。阿蘇に来て一番思うのは、「こんなにすごいのはなあ。こんなところないよね。」ということだ。それでも世界の観光地からすれば、情けないくらいの呼び込み数だ。「世界の阿蘇なのに、売れないよね」と地元の人言う。自分は本当によいと思っているから、どんな冒険でも投資でもする。来た人をがっかりさせないように、喜ばれるように、どんどんつくり変える。

岩美町に置き換えると、外部の人に知恵を借りた方が早いと思う。外部の人にやらせてみるという地元の方の度量も必要なのでないか。

どんなに頑張っても、小さい時から見ているものは当たり前そこにあって、「何がいいの？」と言われても、地元の方は表現の仕様がな。外部から来ている人や移って来た人の意見を聞いて、取り入れて、そこを光らせることが大事だと思う。

問：岩美町のキャッチフレーズは、「海・山・温泉」だ。素材はあるが、どのようにすれ

ばよいと思われるか。

答：着眼点の違いがあると思う。

イメージでよい。何かひとつ秀でるもののイメージを輝かせて、それを見に来てもらう。そうすれば、他のものも口コミで広がる。磨けるものをひとつつくって、「来てみたらびっくりした」ということの方がよい。

「これを見に来たけど、魚もおいしかった」という方が、旅の楽しみがあるのではないか。何か光るものをひとつ見つけて、徹底的に磨き上げて光らせて、それを媒体に売り出して宣伝すれば早いのではないかと思う。

岩美町の素晴らしいところをひとつ切り取って、そこにぽんと何かを置いて、それだけ売り込むことがよいと思う。それを体験（見る・触る・におう）しに人が来る。

不便でも、毎回来て同じ体験ができなくてもよいと思う。ありのままの文化の提供、たった一回の体験、それが旅の着眼点だ。

岩美町にも何か光るものがあるはずだ。それを利用すべきだ。「岩美町に来て、こういうことをやりませんか」と提案するのがよいと思う。それを「瑞風」で売り込んでもらう。

「岩美町にこのタイミングで来た時は最高だった！」ということが大事だ。「これを見にきませんか」と、それだけ売り出した方がよい。これだけは岩美町でないと体験できないということが大事だ。

岩美町（東浜）に瑞風を停車させると言った方は、岩美町に何かあるからそう言われたのだと思う。

旗印をひとつつくって、それに光を当てて、お金をかけて告知すれば、その旗印を見に来てくれると思う。

「ひとつでよい！！」

#### 【4】岩美町として学ぶ点や検討すべき事から等

1. 綾町、西米良村とも基幹産業である農業の振興・育成に力を注いでいる。地元産業の育成を地域の活力を高める基本にすることが大事だ。加工品も6次産業化もその上に実を結ぶ。わが町も、第一次産業である農業、漁業の振興発展のため、何ができるか、何をなすべきかを、拠点施設としての道の駅開業を機に、町あげて考え、実行することが必要だ。

2. 綾町、西米良村とも岩美町と同じ「小さくても輝く自治体」の仲間である。「綾町だから」できること、「西米良村だから」できることを政策化して取り組む、「小規模だからできるきめ細やかな取り組み」（西米良村）一地域に当たり前にあるものの値打ちを再認識し、光をあてるという地道な取り組みを長年にわたって努力している。

綾町では、生活の基盤であった山の保護と農業振興を基盤に、自然生態系農業に早くから着手、目の前にある照葉樹林に吊り橋などあるものを巧みに生かす、西米良村では、もともとから村にある素材に歴史を合わせるなどストーリーを大事にする、少ししか収穫のない米も「おいしい」という付加価値をつけるなど、それまでとは違った発想で取り組んでいる。

「HPでみると岩美町は地域資源が素晴らしい」（綾町担当者）、「岩美町に瑞風を停車させるといった方は、岩美町に何かあるからそう言われたのだと思う」（阿蘇・中山社長）と

いう発言があった。わが町でも、本気になればさまざまな施策の展開ができると思う。

**3. 住民の力の発揮とそれを実現するための行政のリーダー・シップが大事だということだ。**

綾町の自治公民館制度は昭和40年代からの長い蓄積があり、その取り組みの成果が、生態系農業推進の組織づくりを始めとする施策の展開として実っている。「月一回の定例の公民館長会議、集落の定例班会議を開き、住民の要望、提案はすぐに反映する。行政は町と議会と公民館で回っている」という発言は印象的だった。

西米良村の役場全職員で編成する地区担当班による支援制度は、村長がリーダー・シップを発揮し、行政提案型ながら住民へ働きかけっぱなしにせず、繰り返し説明し、理解を得ながら、役場職員と住民と一緒にやっている。

わが町での行政懇談会や集落担当員制度のあり方も、住民自治の力を発揮するために改善、発展させるという角度から必要な見直しと実践が必要ではないか。

**4. 地域の良さを発見・再認識するために、外部の人の知恵を借りることに本気で取り組むことが必要だと考える。**

西米良村は地域づくりのコンサルタントを役場に入れており、アドバイスを受けながら、村長が旗振りをしている。村に当たり前にある(と村民は思っている)素材を生かし、ストーリーに仕立てることなどは、コンサルタントの知恵が生きている。

綾町では、40ほどの工房があるが、綾町の水に着目して入ってきた一人の染色家が始まりで、陶芸も宮崎県で第一号の方が綾町で始めたのがきっかけとなり、世界的なガラス工芸家を含めていまの数になっている。

阿蘇の中山社長もご本人が阿蘇出身ではなく、地元に住んでいる人より地域資源のすばらしさにほれ込んでいる。

わが町も、瑞風の東浜駅停車にこだわったJR関係者があり、アニメ「Free!」の聖地巡りをきっかけに、岩美ファンになっている都会の若者がたくさんいる。この人たちが発見し、ほれ込んでいる岩美の価値を、われわれを始め、町民全体の認識にしていくことに取り組んでいきたい。

**5. 何よりも大事な宣伝媒体は口コミであり、その「一番の口コミは町の人で、地元の人からの応援が大事だ」(中山社長)。**

綾町は、ふるさと納税の返礼品をきっかけに、綾町産品は「良いもの」と思っていただけ、産品を直接申し込んでもらうよう、アイテムを38用意し、工芸品+農産物なども用意している。これも口コミによる宣伝となる。

西米良村は、シイタケ、ホオズキ、カラーピーマン、柚子など特別に珍しい産品ではないものを、地元加工グループの手づくり味噌・漬物などふるさと村民制度(会員制)として販売し、全国に700人の会員を擁している。

「Free!」の若者たちがSNSで岩美の自然や食べ物を動画で発信しているが、いまの口コミは、口伝えにとどまらない拡散力を持っている。こうした口コミ媒体を活用するための知恵を発揮することが可能だし、必要である。

**6.** ブランド化することの大事さをあらためて考えさせられた。

自然でも産品でも歴史・文化でも、岩美の良さを浮き彫りにするものであれば、何でもブランド化の対象となる。

ブランド品だけで、たとえば農業者の経営と生活が成り立つものでない。ブランド化、ブランド品の役割が大事だということ。

阿蘇の有機無農薬農産物にこだわっている中山社長は、こだわりの有機農産物を提供することで、ロコミで阿蘇地域と地域特産品の価値を高め、広めることを展望している。

綾町は、「ほんものを求め、ほんものをつくる町づくり」のさまざまな施策によって、「産地として選ばれる綾ブランド」に結び付けている。特定のブランド品だけでなく、綾町産への信頼を獲得している。集落単位の文化祭にも宮崎市内などから200人ものお客さんがやってきているのは、綾町産への信頼が背景にあると思う。

西米良村のストーリーづくり、手づくり産品も、西米良村なりのブランド化だと思う。それがお客さんにとって特別の産品になっていく努力、信頼を獲得する努力をしていることが大事だと思う。

**7.** まとめの最後に、視察先はどこも、町づくり・行政運営のきちんとした考え方（これを哲学といえいえる）を持ち、ぶれることなく貫いていることが、共通している。加えて、そのスタンスから打ち出す施策は、思い切った内容であることが印象的であった。

わが町として掲げる目標を達成するために、人並でない、必要な施策の展開と、町民と地域・集落の知恵と力を発揮してもらうための、これまで以上の努力が求められている。

産業福祉常任委員会としても、町発展と町民生活向上の思いを共通にし、視察で学んだ内容を今後の委員会活動で生かしていくよう努めたい。

以 上